

*** 今日の健康 (5月) *** < 帯状疱疹の発症予防に水痘ワクチン (その2) >

米国では帯状疱疹が増加傾向

1996 年から小児に対する水痘ワクチンの定期接種が行われている米国では、水痘の患者数や死亡者数、合併症例は減少したものの、水痘の自然流行が起こらなくなり、VZV 特異的細胞性免疫が再活性化せず、その結果水痘帯状疱疹ウイルス (VZV) が再活性化することで帯状疱疹を生じる患者が増えつつあります。

今後、さらに帯状疱疹の発症者が増加する可能性を危惧し、米国では米食品医薬品局 (FDA) が 60 歳以上を対象とする帯状疱疹ワクチンを承認しました。

2008 年には米国予防接種諮問委員会 (ACIP) が、免疫抑制状態になく、帯状疱疹を発症していない 60 歳以上の高齢者に対するワクチン接種を推奨しています。

欧州でも同様の理由から、2006 年に欧州医薬品庁 (EMA) が 50 歳以上を対象とする帯状疱疹ワクチンを承認しました。



その決定の根拠となったのが、1998 年 11 月から 2004 年 4 月まで、60 歳以上の 3 万 8546 人を対象に帯状疱疹ワクチンの効果を検討した二重盲検無作為割付比較対照試験の結果で、日本で開発された Merck 社の水痘ワクチン「Varivax」接種群と偽薬を接種した対照群で、帯状疱疹の発症頻度、重症度、帯状疱疹後神経痛の発症頻度などを検討しました。

平均追跡期間は 3.13 年で、その結果、帯状疱疹の発症率はワクチン接種群が 1000 人年当たり 5.42、対照群は 11.12 で、ワクチンの接種が発症を 51.3% (44.2-57.6) 抑えることが明らかになっています。また、ワクチン接種群 27 人、対照群 80 人が帯状疱疹後神経痛を発症し、その発症率は 1000 人年当たり 0.46 人と 1.38 人で、接種により発症率は 66.5%減少しました。

国内でも、水痘ワクチンを 50~79 歳の 129 人に接種したところ、VZV 特異的細胞性免疫が有意に高くなったとの研究結果が示されています。(Takahashi M, et al. Vaccine. 2003;21:3845-53)

水痘ワクチンの有効性を示すデータが示されたことから、国内で接種されている乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」の添付文書にも、接種対象として小児以外に「水痘に感受性のある成人」が追加されました。具体的には医療関係者、医学生、水痘ウイルスに対する免疫能が低下した高齢者、成人女子 (妊娠時の水痘罹患防止のため) が加えられています。

「現時点では帯状疱疹予防を目的とした国内の治験結果が示されていないので、このような記載となっています、高齢者への水痘ワクチンの接種は実質的な帯状疱疹予防になる」とされています。

記事紹介 2015.2月号日経メディカル

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861
天文台通り多摩信用金庫のななめ裏